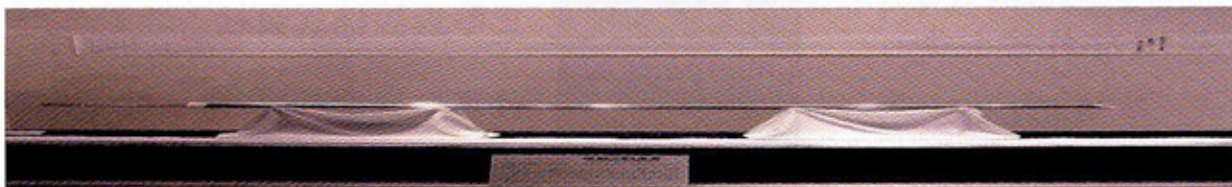


科学の数値と技の融合

機械科金属コース 最後の卒業生

佐藤 利美



消費税にも及ばない1%前後のわずかな炭素と言う、元素が入ることで鉄が応用範囲の広い鋼に成ってしまう、この現象のメカニズムを理解できたことは、ここ、工学院大学専門学校にて、学ぶことができたからと感謝しております。

小生が入学したのは、昭和59年(年齢39歳)でした。当初は10数名の学生がおり、若者に混じりこのおじさん学生は勉強に付いていくのに必死でしたが、1人減り、2人減りと少なくなり2年生に進級した時は40過ぎのおじさんばかり3名でした。無事3名共、卒業できたことは本当に嬉しかったです。それに私共が金属コース最後の卒業生に成るとは、夢にも思いませんでした。

金属の勉強をしようと思うには人それぞれの訳があると思いますが、私は37歳頃から鍛冶修業を始めてしばらく過ぎたころです。師匠(岩崎重義氏)から鍛錬中に、しばしば炭素量の話が出てきて1.2%位までの鋼は扱いやすいが1.3%過ぎると鋼としては非常に難しくなる・・・等の数字がいっぱい出てきて、この師匠は何でこのような言葉が飛び出すのか色々話を聞いていくうちに師匠の父親(岩崎航介氏)が帝国大学(現在の東京大学)の冶金科で俵国一先生に徹底的に科学手法を叩き込まれたとの事が解りまして、その父親から指導を受けた師匠の下で修行をするには科学的な裏付けが絶対に必要なのだと思い入学を決意したわけですが、今度は学校探しです。私には家族がいる、

仕事もある、鍛冶修業をやっているだけでも迷惑を掛けている、これ以上迷惑は掛けられないと色々探した結果、私にぴったりの学校があった。金属コースが有り、しかも夜でよいこと、交通の便も良い京王線1本で行ける、飛びつきました、すぐに願書を取り寄せ入学手続きをとりました。

入学して担任の先生の名前がなんと坂田邦一先生、師匠の父親の恩師のお名前(俵国一)とは字が違いますが読み方が一緒とは何と偶然なんだろうと驚きました。その後、坂田先生(後の西澤)から俺は犬のおまわりさんかと言われてながらも徹底的に熱処理の仕方を教えていただきました。そして2年生になったある時金属組織学の時間に、高木先生を待っている間、ある本を読んでいるところに先生がお見えになり私の読んでいる本を見て「縦書きのめずらしい本を見ているがどんな本なのだ」と言い手におとりになり、「なんだ、航介さんの本か」と、この言葉に私は啞然としましたが、すぐに謎が解けました。

師匠の父親(岩崎航介氏)が俵国一先生の下で研究中のとき高木先生は俵先生の助手として一緒に研究をしていた話を以前、師匠に聞いたことがありました。その高木甲子雄先生その人だとは又びっくりです。私は何か因縁のようなものを感じました。くるべくしてこの学校に入学したのだと、つくづく思いました。